

ブオオオッ

特集

神保町 出版社 で 立ち上げた日記





CONTENTS

- 4 特集 神保町で出版社をたちあげた日記
- 6 言論の拠点をつくりたい！そのはじまり。
- 8 The Road to CHIHEISHA
- 12 いよいよ本を出す！
- 14 書店に本を届けたい！でもどうやって????
- 16 月刊『地平』 珠玉の人気連載
- 18 そして1年半後——新メンバーがやってきた！
- 20 CHIHEI MEMBERS
- 25 コラム 激動の地平に立つ僕たちと今とこれから
- 28 コラム 神保町ランチ探検隊 ぼくとランチ
- 29 Review of Books
- 32 これまでにでた本



地平社

地球と平和の課題に向き合う本と雑誌
新たな言論の地平を拓く

コトバは無力ではない。なぜなら、私たちは無力ではないからだ。コトバには力がある。私たちをつなぎあわせ、思っていることを伝えあい、記録し、主張し、議論し、コミュニティと決まりごとをつくり、社会をより良いものに変革することができる。この力はしかし、私たちを分断し、疑心暗鬼にさせ、事実を覆い隠し、たがいを傷つけ、より生きづらい社会をもたらすこともできる。その力を知悉したコマーシャルイズムの洗練されたCMや政治の空虚なメッセージがコトバから意味を奪い、デジタル空間にあふれだす冷笑的な情報が私たちのコミュニケーションを変質させている。私たちがいま直面する危機、地球と平和の危機、民主主義の危機、生活の危機、人間どうしの関係性の危機に対して、コトバの力——私たちの力——を復興させ、あるべき議論の姿をとりもどし、新たな地平を切り拓きたい。そのために、この雑誌を創刊する。（『地平』創刊号より）

The Road to CHIHEISHA



メンバーが集う

□屋号を決める

□事業計画をたてる

□事務所を借りる

□本を作りはじめる

□本を書店に届ける

□雑誌も出すぞ!

□その後の編集部

Editor In Chief



ドビチャー



本の街、東京・神保町で、
新しい言論の拠点を作りたい!
起業経験ゼロ、出版営業未経験、
事務所なし……。
それでも出版社をつくるのだ!
構想から約1年の準備期間を経て誕生した地平社。
その立ち上げまでの記録。

特集1

神保町で 出版社を たちあげた 日記



✓メンバーが集う

■屋号を決める

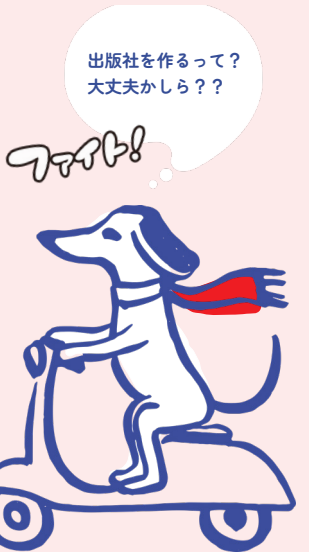
■事業計画をたてる

■事務所を借りる

□本を作りはじめる

□本を書店に届ける

□雑誌も出すぞ！



言論の拠点をじっくりたい！ そのはじめり。

地平社は、地球と平和の課題に向き合う出版社。2024年1月に誕生しました。すべての始まりは、「出版社をつくらう」と、未来の地平社社長となる熊谷伸一郎編集長が心に決めたこと。それからメンバーを集めて屋号を決めて、事務所を借りて株式会社を立ち上げて……。はじめてづくしでドタバタな思い出もしたが、そのすべては楽しかった！ 出版不況のいま、どうして紙媒体の出版社をつくったのか。熊谷編集長に聞きました。



熊谷伸一郎（社長／編集長）

聞き手 by
丸井 春（雑誌編集部）



Q 熊谷さんは、長く雑誌の編集の仕事をしてきて、独立のために2023年に前の職場を退職しています。その後地平社を立ち上げて今にいたるわけですが、自分で出版社を立ち上げることはいつぐらいから考えていたのですか？

熊谷 2022年の10月からです。ただ、前史は長い。さかのぼると、私は20代前半までフリーの編集者・ジャーナリストとして雑誌に記事を書いたり、雑誌の編集をしたりしていたのですが、2007年、30歳の時に縁あって前の会社（岩波書店）に入社することになったわけ。実はその頃は、ジャーナリストの本多勝一さんなどさまざまな人と新しい日刊紙を作ろうというプロジェクトがあって、私も参加していたんです。それを頑張ろうとしていた矢先だったのですが、原稿を書いていた縁もあって『世界』で働かないか、と誘われて、2、3年お手伝いをするぐらいのつもりだったのが、けっきょく、居心地が良くて17年も寄り道してしまいました（笑）。ただ、『世界』では本当に多くのことを学ばせてもらいました。書籍も雑誌も、あるいは左派的な動きも、私は右肩下がりの季節しか経験したことがないわけですが、個人的には、岩波から現在の地平社に至

るまで、本当に楽しく、また得難い経験をさせてもらってきたと思っています。

『世界』で編集責任者も経験させてもらったのですが、2022年10月に営業部に異動となりました。新たな勉強にもなることでもあったのですが、なんとというか、私自身は、世の中にかを発信していないと気がすまないというか、その時々状況についてああじゃないかこうじゃないかとやっていた人間なんです。だから、長い寄り道をしたけれども、もともと道に戻ろうと。つまり、自分たちの独立した発信拠点を作りたかったわけです。

ただ、その17年の間に、紙の新聞を新たに出すというのはもうありえないことになっていて（笑）。いま、ひとり出版社は増えていますが、出版のいいところは、なんと言っても小資本で始められることです。17年働いたことで退職金という大変にありがたいものが入るのでも、これを妻子の了解を得た上で、全額、地平社の設立のために使うことにしました。

Q 発信の場としては、新聞を新たに作るのとは難しくて、ウェブという媒体もありますよね。出版社という形態を選んだのはなぜですか？

熊谷 何かを社会に発信したいという時に、

ウェブ、新聞、テレビなど、さまざまメディアがあるけれど、テレビや新聞はどう考えたって資本的に無理で、ウェブは採算がとれそうもない。私自身が経験を積んできて土地勘があるという点でも、出版というのが一番身の丈にあっていて、ゲリラ的にいるんなことのできると思っただけです。

自分の2023年元旦の日記を読み返すと、今年やることとして「対抗的な言論の場を作る」と書いていて、その前の2022年10月にはすでに、総合的なメディア企業を立ち上げたことが大きなことを書いてある（笑）。「社会参加する意欲をもつ市民の知る権利に奉仕し、その動きを支えるメディア企業を立ち上げる」と。そういった場にはもちろんデジタル的な展開も不可欠です。けれども、いまはデジタルメディアが乱立していて、いくらお金をかけても埋もれちゃうだろうと思った。それに、紙媒体が持つ存在感や信頼性はまだまだあると思っただけです。それで2023年を準備期間、2024年の創業を決めて、仲間に声をかけはじめました。

Q 当時は私も他のメンバーも別のところで働いて

いたり退職間近だったりして、もちろんまだオフィスもなかったわけですが、貸会議室に集まってよく勉強会や編集会をしました。飲みに行ったり。いま、ひとり出版社が増えていますが、熊谷さんはそれは選択しなかった。

熊谷 そうだね。最初から、出版社を立ち上げるなら7、8人でやろうと考えていました。もちろん、ひとり出版社は素晴らしい存在で、日本の言論の多様性を実質的に支えていると思います。でもさっき話したように、私は対抗的な言論の「拠点」を作りたい。そうなるという人で「拠点」というのも変でしょう（笑）。あとは、雑誌と書籍、ウェブを展開するとなればそれなりの人数が必要かなと。

地平社はいまスタッフが7人、アルバイトさんが2人です。声をかけた仲間たちはみな何か

熊谷伸一郎（くまがい・しんいちろう）

1976年生まれ。フリージャーナリストを経て2007年、岩波書店『世界』編集部に参加。2018年7月から2022年9月まで同誌編集長をつとめる。在職中の17年間に2000本以上の雑誌企画を担うとともに、単行本や新書、ブックレットなどを30冊以上担当。『世界』編集長在任中、3年連続で販売部数・定期購読部数を伸ばすとともに、調達見直しや残業削減などの改革も進め、同誌の刊行を維持する。2023年7月、独立のため退職。著書に『なぜ加害を語るのか』（岩波ブックレット）、「反日とは何か」（中公新書ラクレ）、「金子さんの戦争」（リトルモア）、「私たちが戦後の責任を受けとめる30の視点」（合同出版）、共著に『非戦』（幻冬舎）など。趣味は読書とバイクと音楽。東京・八王子で妻と子ども3人と猫とともに暮らす。

初期メンバー。事務所開設日に少し早い創業のお祝いをした日。2023年12月。



1月～ 熊谷、事務所に 布団を買う

書籍と雑誌の創刊、会社のさまざまな業務のために、猛烈に忙しくなってきました。特に熊谷は会社に泊まり込みで作業する日が増え、布団を購入し、会議室の机の上で眠る体制ができました(笑)。

ちなみに、この後2月～5月はさらに猛烈に忙しくなり、2月は13泊、3月は14泊、4月は8泊、5月は14泊という状況でした!



ONE MONTH TO GO UNTIL LAUNCH!!

12月16日 雑誌創刊に向けた準備を本格的に開始

この日、月刊誌創刊に向けた長時間の編集会議を実施。コンセプト、具体的な特集、企画、売り方、タイトルなどを議論しました。まだ雑誌の名前も決まっていないころ。



まだ借りたばかりの事務所。右上が編集長。2023年12月。

12月7日 事務所開設!

神保町一丁目の現在の事務所に入居! 編集スペースと打ち合わせスペースのあるとても良い物件に出会えました。まだ何も無い事務所に椅子だけを搬入。



夜に会議と懇親会をしておいに盛り上がりました!

12月8日 取次口座開設

取次会社(トーハン・日販など)と面談。地平社としての出版社口座を開設できました!

12月25日 X'mas 出版流通の勉強会

椅子・机・コンピューター・インターネット環境などが導入されて事務所の基本設備が整いました! ということで、熊谷の友人の書店員の方を事務所に招き、出版流通についての勉強会を事務所で開催しました。

ぶじに創業できてよかったねー!



ぶーん

2024.1.16

地平社創業!

会社の登記が完了し、株式会社地平社が正式に設立されました!! 資本金980万円。熊谷の退職金のほぼ全額です。

とまでできあがっているの、それに則ってやれば比較的スムーズにさまざまな話が進むこと。取次さんをはじめとする取引先との話し合いも、融資など銀行との話し合いもそうです。もちろん、たくさん勉強もしましたが、仕組み自体がよくできているのであまり迷わなくて済む。ただ、大変なのはそのルールが膨大にあって、習得するのがとにかく大変です。特に税金処理は複雑で、出版に独特なルールも多く、どこにか今は税理士さんに助けってもらいながら進めている感じです。出版は流通や取次のシステムなども独特ですから、出版界の全体状況も視野に入れていかないとけない。これは一会社社員として働いていた時とはまったく違うところ。設立のための実務は創業の時だけうまくこなせばよいと言えはよいのですが、よく調べないと損したがるうなというところはたくさんあります。これも株式会社の良いところですが、起業支援の制度がいろいろあること。地平社も東京都千代田区の創業支援制度を活用して、事業計画づくりのサポートなどもしてもらって助かりました。最初は本当にわからないことだらけなので、そういう時に相談できる人がいることが重要だと思います。



2月ごろ 事業計画づくりに着手

創業に向けて関係者との相談を本格化!

4月 創業メンバーで読書会、新刊批評会を開始

月1回のペースで集まり、新刊や重要書籍を読んで自分たちの出版イメージを形成していきました。

6月 初めての編集会!

自分たちがどのような本を作っていくかについて議論を開始しました。

9月～ 立ち上げに向けた具体的な検討を本格化

創業メンバーのミーティングが月1から週1回程度に。朝まで議論した日も朝まで飲んだ日も。この頃から営業方法や出版流通の仕組みについての調査・共有を進めました。

11月ごろ～ 創業支援制度や支援機関に相談を開始。

資金調達を検討を本格化。執筆者のみなさんや出版取次など関係者へのアナウンスを開始。

7月 熊谷が前職を退職

創業に向けて熊谷が前職の会社を退職。本格的に動き始める。



ちなみに、退職後は住民税や社会保険の手続き、まとまった額の支払いなどもあり、退職して創業する場合には個人的な資金計画の重要性も実感しました。

The Road to CHIHEISHA

2023 2022.10

START

出版社を立ち上げる構想を熊谷が持ち始める。

1月ごろ メンバー集合

周囲と相談
2024年1月の創業を目標に熊谷が周囲との相談を開始。この時期の前後に、地平社の主要メンバーとなる人たちもそれぞれの理由で退職したり退職準備をはじめたり。

勉強会を開始
創業に向けた勉強会を数名で開始。「リベラルで対抗的な言論の場」「市民に信頼され、市民の社会参加を支える総合的なメディア企業」を目指す方針を共有。月刊誌を軸に、ウェブ、書籍、動画など複数メディアを組み合わせさせて情報発信を行なう構想を議論。

- ✓メンバーが集う
- 屋号を決める
- 事業計画をたてる
- 事務所を借りる
- 本を作りはじめる
- 本を書店に届ける
- 雑誌も出すぞ!

しらの編集をしてきた経験を持つメンバーなので、地平社は全員編集ができます。営業担当の工藤くんも、たとえばハミッド・ダバシの本を企画したり、雑誌の記事も企画したりしています。経理関係は私とアルバイトさんでしていますが、全員が電話対応をして注文も受けるし、掃除からイベント販売まで、あらゆる雑用もこなしている。部署という垣根はなるべく作らずみんなが協力してさまざまな動くことでなんとか日々をやり過ごして(笑)、会社を動かしている感じですね。それが楽しいのだと思います。

Q 地平社は、一応書籍チームと雑誌チームに分かれてはいますが全員がどちらも経験しているし編集会議では誰もが企画を出せますね。営業担当のスタッフも編集も取材もしています。とはいえず、経理や助成金など会社のコアなところは設立前からずっと編集長が担っています。株式会社を立ち上げる、という点を振り返っていかがですか?

熊谷 会社を作るって、簡単なところと大変なところがあったなあと思うんです。簡単なのは、これは株式会社という形態を選んだ理由の一つでもあるんだけど、株式会社はシステム

The Road to CHIHEISHA

2024

2024年2月~
経理・財務体制の構築
会計システムの整備、
銀行融資の相談など、
経理・財務体制の構築
を進めはじめました。

3月ごろ
1000万の融資を受ける
印刷費や広告費の増大を
見込み信用金庫に融資相
談。1000万円借りました。

ところが、注文受付開始
当日にFAX機が不調とな
り、受信不能のトラブル
が発生。徹夜で復旧対応
したのも、いまではいい
思い出です。



2月1日
月刊誌の名前は
『地平』とする!
この日、雑誌創刊に向
けた本格的な編集会議
を開催。制作体制・流
通・宣伝・資金計画な
どを議論。5月下旬校
了、6月5日刊行とい
う雑誌創刊スケジュール
を決定。これ以降、
印刷所や取次との交渉
や相談が続きました。

2月X日
書籍の創刊
6点を決定!
創業時の書籍刊行点数
を8点(実際には6点
となりました)とする
方針を決定し、執筆者・
装丁家(赤崎氏など)
との作業を本格的に進
めました。

2月22日
初めての給与を支給
「小さく産んで大きく育
てる」が合言葉の、少額
の給与です……。

4月23日
書籍発売日!
地平社初の書籍6点を刊行。
ちなみに初めてのお客さん
は、ちょうど刷り上がりの日
に来社して、現金で本を買
っていかれたジャーナリスト
の後藤秀典さんでした。

4月26日
初の書籍刊行イベント
『経済安保』の刊行記念イ
ベント。院内集会という地
平社らしい形での初イベ
ント。初めての集会販売を
経験。約60冊を販売し、
大きな手応えを得る。



創業記念イベント、
大盛況だったねー

4月27日
創業記念イベント開催!
出版クラブビルにて創業
記念シンポジウムと創業
記念パーティーを開催。
200人以上が参加。『地
平』の年間購読受付も開
始し、この日だけで約80
名の申し込みをいただきま
した(涙)。

6月5日
月刊『地平』創刊!
初日から書店から大部数
の追加注文が届くなど、
大きな反響があり、本当
に安心しました。

Q それは月刊誌『地平』の特色としても色濃く出
ている気がしますね。地平社が2024年1月に
誕生して、4月に本を出しはじめて、さらに6月
には月刊誌を発刊しました。雑誌が売れないと言
われるいま、新しい、しかも全国に流通させる雑
誌を出すというところで挑戦でもあったと思います。

熊谷 硬派な言論メディアの必要性は、いまこ
そ必要なんじゃないかと強く考えつづけている
んです。本や雑誌が売れない時代になって、「売
らんかな」に走るメディアも少なくない。それ
がまた読者の信頼を損ねてしまう負のスパイラ
ルに入ってしまったっている。それは言論の死に至
るサイクルですよ。やはりきちんとした言論
メディアを作りたい。私は雑誌が大好きで、自
分でもたくさん購読しているのですが、だんだ
んと左派的で個性的なメディアがなくなってい
てしまっていますよね。でもまだまだやる余地
はある。日本はこれからそういう対抗的な言論
が伸びていかなければいけないと思うんです。
今は政治的にも右派的な力が強いですが、それ
がずっと続くとは私は思っていません。巻き返
しの可能性は十分にあるし、巻き返さなければ
いけない。だから、そういう動きのプロモーター
となるような雑誌を作りたいなと思ったわけ
です。

とはいえ、創業やら単行本の編集やらでバタ
バタで、当初は、月刊誌を出すのはもう少し落
ち着いてから、とも考えていました。でも、イ
スラエルのパレスチナ侵攻などいろいろと差
迫っていた。それに応えるためのメディアを早
急に作りたくて、みんなで話し合っって発行を決
めました。私が、もう少し情勢を見るか……、
というようなことを会議で話したら、丸井さん
と石田くんが、え、早く出しなさいよ、とい
う感じで、背中を押された(笑)。

私は、社会を動かすのは右であれ左であれ思
想の力だと思っっているし、さまざまな思潮を代
表するのは雑誌というメディアだと思っていま
す。雑誌をもたない思潮や社会運動というもの
は存在しないと考えています。私自身は日本の
戦後民主主義、すなわち平和主義を基調にもつ
民主主義を大事に思っっていて、それをバージョ
ンアップしながら、二度と戦争をしない社会の
まま民主主義を深めていくことが、この社会に
とって大切だと思っっています。そうした思潮と
社会運動を可視化し、具体的な政治エネルギー
として実体化することを後押しするような雑誌
を作りたいと思っっているんです。

Q 創刊号の特集は「コトバの復興」と「パレスチ

まあ、いま振り返ると、創業としては、けっ
こう基本に忠実に、アクロバティックなことを
したわけではなかったかなと……。よく会社に
泊まり込んではいましたが(笑)。

Q そうこうして地平社という屋号が決まったわけ
ですが、先ほど出た「言論の拠点」として大事に
していることは何ですか?

熊谷 地平社という名前は、それこそまだ神保
町の貸し会議室に創業メンバーが集まって議論
していた時に、みんなで何十も案を出し合っ
て決めたよね。外形は株式会社だけれど、実質的
には世の中に噛みついていくための「結社」で
あるというのが基本的なイメージなので、3文
字の漢字で「〇〇社」というのはしっくりきま
した。
地平社という名前には、地球と平和を考える、
言論の地平を拓くという意味が込められていま
す。出版社としての性格としては「対抗的な言
論」。今の状況に対してきちんと噛みついてい
ける言論の拠点にすること。やや口幅つたく言
えば、パブリックな利益に対してきちんと奉仕
する言論メディアであることです。

ナとともに」でした。創刊号のメッセージには、
締めめの言葉として「コトバの力——私たちの力——
を復興させ、あるべき議論の姿をとりもどし、新
たな地平を切り拓きたい」とあります。あれから
20号、特集は60本以上になるわけですが、特に思
い入れのある特集はありますか?

熊谷 選べないね。全部いい(笑)。

Q 地平社はまだまだ新しい会社です。お金はまだ
余裕がないかもしれないけれど、元気とエネルギー
はある(笑)。書籍のブックレットシリーズや『地
平』のウェブ版、ポッドキャストを立ち上げたり、
挑戦したいことはわりと何でもしてみようという
雰囲気があります。私自身、まだまだ地平社は楽
しそっだぞと感じていますが、社長、編集長とし
て地平社の今後の展望を教えてください。

熊谷 ほんと、楽しくやっていますよ。一
度きりの人生なんだし、信頼できる仲間たち
と、言論を通じて少しでもいい社会を残すため
に、言いたいことを言って、もつかることはな
いかもしれないけど(笑)。

もうかる道もめざしていきたいと思います! ありがと
ございました!(2026年1月、地平社にて)

The Road to CHIHEISHA

いよいよ本を出す！

ともかくにも本を出さなきゃ、出版社は始まらない！
一気に六本の刊行を決めた地
平社編集部。そのうらがわ。



Text by
木村 亮 (書籍編集部)

いよいよ
本額発揮だねー



さて、いまの編集部は？
木村さんに聞きました。

地平社の書籍の企画はどう決まるのですか？

企画は全員で議論のうえ決定しています。地平社メンバーは誰でも企画提案できます。地平社メンバーが作りたいたい本ならば、資金や人手などの事情がないかぎり、基本的に私は反対しません。それぞれの関心や背景はお互いわかっているし、企画の意義や新しさも各自で判断できるので、「審査」みたいなことはほとんど不要だと思っています。

信頼がないとできないことですね。

はい。多くの出版社では、企画提案にあたってもっとマーケティング的な努力の跡を示すことが、陰に陽に求められているのではないのでしょうか。すぐに「確実に売れるという」根拠」を示せということですね。それが全く不要とは思わないし、そうせざるをえない状況はもちろんです。そうしたプレッシャーの結果、編集者がのびのびと企画を出せなくなる弊害も大きいと思います。「審査」する側が正しいとも限りませんし。

だから地平社の場合、「企画ができない」という悩みはありません。逆に、作りたいたい本が多すぎて、編集が間に合わないことに課題があります。まだ試行錯誤の最中です。

- ✓メンバーが集う
- ✓屋号を決める
- ✓事業計画をたてる
- ✓事務所を借りる
- 本を作りはじめる
- 本を書店に届ける
- 雑誌も出すぞ！

そんなこんなで二〇二四年一月に地平社が爆誕し、四月に書籍六点を一挙刊行することになる。この六点は、内田聖子『デジタル・デモクラシー』、南彰『絶望からの新聞論』、東海林智『ルポ 低賃金』、長井暁『NHKは誰のものか』、島蘭進・井原聰・海渡雄一・坂本雅子・天笠啓祐『経済安保が社会を壊す』、三宅芳夫『世界史の中の戦後思想』。当初は、アーティフ・アブー・サイフ著、中野真紀子訳『ガザ日記』や、岸本聡子『杉並は止まらない』も入る構想だったが、さすがに間に合わず、それぞれ五月・十一月の刊行となった。逆に、『経済安保が社会を壊す』はもともと予定になく、差し迫る情勢のために急遽加わったものだった。生まれたときから落ち着きのない会社であった。

六本の奥付には、「二〇二四年四月二三日初版第一刷発行」と高らかに刻まれている。「本の日」とされるサン・ジヨルデイの日に刊行しようと、ずっと前から決めていたのだ。しかし実際にはこの日に間に合わず、取次搬入日は四月二五日だった。生まれたときからいいかげんな会社であった。

これらの本は、まだ事務所もなく貸会議室にときどき集まっていた頃に、熊谷さんが企画したものだ。あれこれ戦略じみたことを考えたラインナップではなく、かねて熊谷さんが信頼し尊敬してきた書き手に声をかけ、自然にできあがったものだったと思う。

ちなみに、この時期に企画された本は他にも多くある。最近(二〇二五年九月)に出た『マルクス・リバイバル』(マルチェロ・ムスト編著、斎藤幸平・佐々木隆治監訳)も貸会議室時代の企画だが、創業の荒波のなかで時間がかかってしまった。まだ刊行されていない企画もある。

創業六点の装丁は、すべて赤崎正一さんが手がけている。熊谷さんと長年、それぞれ毎月一緒に仕事をしてきた熟練の装丁家をお願いできたのは幸運だった。赤崎さんも、地平社のスタートを物心両面で温かく支えてくださった。この年の九月に赤崎さんが急逝されたことは、地平社にとって最初の悲しい出来事であった。

社会・人文書の出版活動はますます苦しくなり、左派の社会運動も厳しい闘いを強いられている。そうしたなかで出版活動を始めた私たちに応援してくださる方は多く、さまざまな場面で話題にしていただけなのは本場にありがたかった。とはいえ、ご祝儀相場はいつまでも続くものではない。これからが本場の勝負だ。

地平社がはじめて出した本

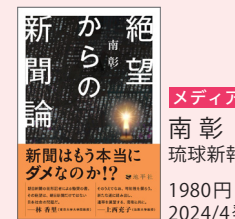
デジタル・デモクラシー

ビッグ・テックを包囲するグローバル市民社会



内田聖子
ジャーナリスト
2200円(税込)
2024/4発売

絶望からの新聞論



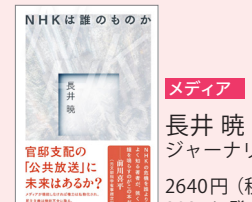
南彰
琉球新報編集委員
1980円(税込)
2024/4発売

ルポ 低賃金



東海林智
ジャーナリスト
1980円(税込)
2024/4発売

NHKは誰のものか



長井暁
ジャーナリスト
2640円(税込)
2024/4発売

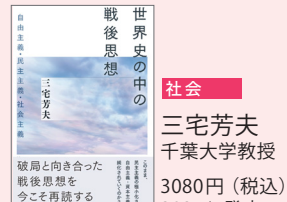
経済安保が社会を壊す



島蘭進・井原聰・海渡雄一・坂本雅子・天笠啓祐
1980円(税込)
2024/4発売

世界史の中の戦後思想

自由主義・民主主義・社会主義



三宅芳夫
千葉大学教授
3080円(税込)
2024/4発売

新聞は、本当にもうダメなのか——。政治への忖度が横行し、部数激減の中で内部から崩れる新聞メディア。どのようなメディア環境を構想すればいいのか。希望を再生することは可能か。元朝日新聞エース記者が考える「新聞の残し方」。

なぜ普通に働いても普通に暮らせないのか。非正規労働者、漂流を余儀なくされる若者たち、シングルマザーや農民、個人請負の宅配ドライバー。働く人々の現場から低賃金の国のありように迫り、非正規労働を急増させた財界の戦略を検証する。

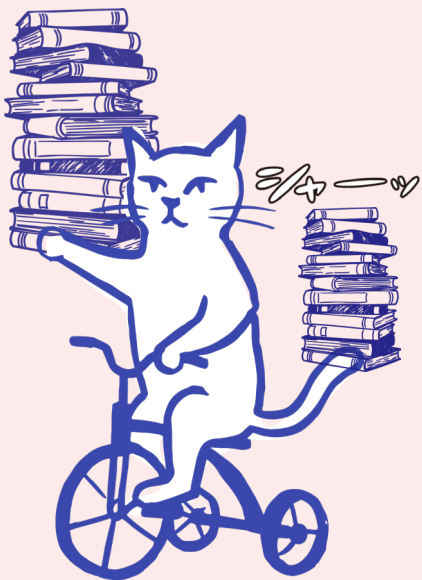
官邸支配の「公共放送」に未来はあるか？ 政治家の介入による番組改変を告発した元NHKディレクターによる初のドキュメント。ETV2001番組改変事件からジャーニズ性加害への加担まで、劣化するNHKの内実を記し、再生の道を模索する。

経済政策の「安保化」、専門知による批判。政治・外交のみならず、経済、社会に侵しつづめる「経済安保」。何が起きているのか。市民的自由や平和的生存権に与えるインパクトを可視化。「セキュリティ・クリアランス」法案をふまえた緊急出版。

危機の今、戦後思想の可能性を再読する。自由民主主義と資本主義のシステムが揺らぐなか、私たちはどのような思想に依拠できるのか——。世界システムの歴史的展開をたどり、その文脈から日本の「戦後思想」を再考する。

The Road to CHIHEISHA

書店に本を届けたい！ でもどうやって???



- ✓メンバーが集う
- ✓屋号を決める
- ✓事業計画をたてる
- ✓事務所を借りる
- ✓本を作りはじめる
- 本を書店に届ける
- 雑誌も出すぞ！

設立間もない時期の、難解極める出版流通へのアプローチを短く回想しよう。

地平社の初期メンバーには、本の販売を直接担当、いわゆる営業職を専門でやってきた人間がいなかった。さて、どうしようかということ、自分に白羽の矢が立った。経験者が誰もいないので、出版業界で仕事をすることがない自分がやるかと誰かやるかと、結局は同じだろうということだ。実際、自分もそう開き直って業務を遂行していった。

が、さて、どうやって売ろう。

文字通り右も左もわからないまま、とりあえず本ができたらすべきことを整理した。すると、流れはどれもこういうことだった。

**書店から注文をとる。
取次に本を送って、書店に配本してもらう。
売れる、わーい。**

売れない、返品されてくる、がーん。

意外とシンプルだ。

しかし、そもそもどうやって注文をとればいいのかかわからない。山ほどある書店にどうアプローチをすればいいのだろうか。とりあえず聞いたことのある大手の書店に向こうか？ 地方はどうする？ 次々に疑問がわき、何から始めたらいのかさっぱりわからない。

そこで頼ったのが版元ドットコムである。ここは、大小を問わず出版社間で情報共有しながら、業界全体の活性化を図る社団法人。当初、JPROやBookCellarに連結する書籍データベースの共有基地、という認識だったが、会員出版社間でつくるメーリングリストが非常に活発で、編集でも流通でも、疑問を投げれば知識のある人が返答してくれる。事務局も丁寧で、尋ねるものはばかられるような超基本的な質問でも、やさしく教えてくれるのである。ほとんど毎週のように電話をして、営業のいろは、流



Text by
工藤剛史
営業部 兼 編集

はれて事務所も借り、ピカピカなオフィスで本を作り始めた地平社編集部。でも、作った本はどうやって売ればいい？
営業担当に抜擢された業界未経験者が、書籍流通の習いと作法を実地で学び、本を書店に届けるまで。
書籍流通はシンプルそうでも奥深い！

通の仕組みに関わるありとあらゆることを教えてもらった（ありがとう、糸日谷さん！）。

ということ、でもこんな感じで注文をとってくるらしいということが見えてきたので、実際にやってみることに。

- ・ファックスを送る（当然、版元ドットコムが提供するシステムを利用！）。
- ・都内の大型書店の人文社会系の棚担当書店員さんを訪ねて仲良くなる。
- ・SNSをがんばる。

これがひとつずつ難しく、また楽しい。ファックスを送るにしても、どんなデザインでどんな情報を手に入れなければいけないのか、原案になるものを探してきて模倣する。当初は、肝心のISBNを記入し忘れたり、必要な欄が抜けたりと、惨憺たる有様だった。それに、書店を訪ねるにしても、どの時間がいいのか。そもそもアポイントをとるべきなのか……。

そんなこんなで試行錯誤をつづけていると、少しずつ形ができてきた。そのまた一方で、取次を介さない流通の仕組みも整える必要に迫られた。独立系書店である。

地平社の設立準備のときから、独立系書店との関係を大事にしていきたいという話が出てい

た。業界が萎んでいく中であって、こだわりの本棚をつくって本を売る。目利きの元書店員が独立起業していることが多く、ともに活字文化を育む尊敬すべき広義の同業者だ。われわれ同様、「新興」であることの共感も相まって、彼らとしっかりとつながろう、と。

独立系書店は、大手取次との帳合がない場合も多い。そのため、どうやって本を卸すのかという問題に直面したことで、直接取引にも踏み出すことに。取次を経由せずに、直に注文を受けて、直に本を発送するのである。

しかしここでもまた多くの疑問が浮上した。委託なのか買い切りなのか。卸し正味は？送料は着払い？

第三者が介在しないので、地平社が決めればいいと言えはいいのだが、書店が納得し得る条件でなければ取引は成立しないだろう。どうすればお互いに関係を築けるのか。取次を介さないことで生じる書店側のメリット、デメリットを勘案する。一般の書籍流通に関するわか知識が蓄えられていたため、比較しながら直接取引の条件を整理することはさほど難しくはなかった。

設立から約二年。業界未経験のまったくの素人が、書店、取次、版元と不躰なコミュニケーションをつづけて、書店流通の習いと作法を実地で学び、本を売っていく。これが地平社運営の業務である。



無事に書店に並びました！

- ✓メンバーが集う
- ✓屋号を決める
- ✓事業計画をたてる
- ✓事務所を借りる
- ✓本を作りはじめる
- ✓本を書店に届ける
- ✓雑誌も出すぞ！
- その後の編集部

そして一年半後 新メンバーがやってきた！

本や雑誌作りもようやく軌道にのって、創業から一年半後の2025年夏、地平社に新メンバー登場。
あなたはどのようにして地平社へ？
単行本を長く手がけてきたという編集者、赤瀬智彦さんに聞きました。



赤瀬智彦（書籍編集部）
聞き手 by 丸井春（雑誌編集部）

——赤瀬さんは昨年8月に地平社に参加しています。まず、まだ歴史も浅い地平社を選んだ理由は？
何だったのですか？

赤瀬 そうですね……雑誌『地平』の創刊号を手にした時に仰天したというか、世の中捨てたものじゃないなと思ったのは、はっきり覚えてます。

直接のきっかけは、Facebookで地平社をフォローしてたんですが、地平ナイトというポッドキャスト番組の動画が流れてきて、編集長の幸せそうな笑顔を見た時です。この人はこの仕事に本当に好きなんだなと思って、映像を繰り返し見ました。それで会いに行つて、6時間くらい喋りました。そうしたら入れていただけることになって。

考えてみると、訳わからんのがいきなり来て、よく受け入れていただけだなと。今更ながら冷や汗が……。

——この日、僕は医師から、この状況を公にしようという提案を受けて、それで出版社に企画を持ち込み、数年かけて小さな資料集をつくりました。それが、二〇〇七年に現代企画室から刊行された『壁の涙』という本です。編集のイロハをその過程で学び、編集長から「美しい本をつくりなさい」という言葉とともに送り出されました。

編集者になってからは、十数年前に作ったエリック・ブラישユの『ヘイトスピーチ』という本がとくに強く記憶に残っています。当時はまだこの語がそんなに広まっていなかったんですが、訳者から、いわゆる「民族差別」とは違う現象が起きてきていると思う、だからこの語を広める必要があるというお話をいただいて。そのために一番適した作品をということで原書が選ばれた。原題は全然違うのですが、内容的にはピッタリだったんです。

本ができたとき、これで社会がちよっとでも変わるはず、という確信めいたものがあつたような。今後、世の中が少しでもよくなるような関わりが何かしらできたらいいなと思っています。（完）

——なんと編集長の笑顔がきっかけとは！赤瀬さんは長く書籍づくり、特に翻訳書を手掛けています。せっかくなので、それについて聞こうかなと。日本の読者にいま届けるべき本って、グローバルなマーケットからどう探し出すのですか？

赤瀬 僕は社会問題に関心が強めなので、ひいかなあ、なんでこんなことになってるのかなあってよく考えるんですよ。それで答えをいつも探してるんですが、説得力を感じた本が海外にあったら翻訳を企画するという事です。疑問と答えが普遍的であるなら、本にしたら自然と売れるだろうみたいな。楽観的すぎでしょうか笑。

——社会で起きていることに対して問題意識をもつ、批判的に考えてみる、ということが大切ですね。赤瀬さんは英語が得意ですか？翻訳書の編集をするのに必要なスキルは？

赤瀬 僕は英文科出身でマクベスとか教室公演でやってました！とか言ったら、なんだか得意そうですけどね。実際には日本語でしか演じたことはありませんし……というか、編集部の



2024年には地平社ブックレットシリーズをリリースしました。これまでに3冊が発売になり、今春には赤瀬さん担当のブックレットも刊行予定です！写真はイベントで販売したときのもの。



発送準備をしているところ。



地平社小話

月刊『地平』の定期購読者のみなさまへの発送は、スタッフ総出でラベル出し〜封入作業をしています。購読者の方がもっと増えて、スタッフだけでは手に負えなくなる日を夢見しています。



石田 翼 ISHIDA TASQUE

●地平社での仕事を教えてください。

主に雑誌関連で、出版取次や fujisan との窓口、編集業務、組版、印刷所とのやりとりといったことをしています。時々、単行本の組版もしています。

●前職では何をしてきましたか？

大学院のあと出版社に入り、異動した月刊誌編集部で熊谷さんに逢着。その後、ブラック企業に片足だけ挟まれてから、フリーランスライターとして週刊誌のアンカーなどを経験。人の縁に助けられてきました。

●自身はどんな性格だと思いますか？

几帳面でA型っぽいと昔から言われていましたが、思い立ったが吉日で行動するし、一人だとぼーっとしていることも多いです。気になったことには過集中して、ごはんを食べ忘れてしまい、空腹で怒りっぽくなることもあります。ごはん、大事。

●休日の過ごし方は？

何か美味しいものを作って食べたり、ゲームをしたり、読書したり、映画やアニメを観たり、インドアなことが多いです。趣味で楽器をやっているの、演奏の機会もそこそこあります。

●最近のニュースは？

高円寺でひとり飲みしているお店が数件あるのですが、ついにどのお店でも、席についた瞬間に飲みものが出てくるようになりました。そろそろ潮時かもしれません。



"IT'S A BOOK. YOU HAVE TO TURN THE PAGES BY HAND, INSTEAD OF POINTING AND CLICKING."



役員

工藤剛史 KUDO KOHJI

●地平社での仕事を教えてください。

何でもやります。書籍営業、書籍イベント等の外部交渉。書籍や雑誌の編集。ポッドキャスト収録。『地平』関連取材。SNSの運用。電話対応。お茶汲み etc

●前職では何をしてきましたか？

大学院博士課程に在籍しながら TBS テレビ報道局でニュースを作っていました。その後、大学は中退、マスメディアからも離れ、おとし"地平社設立会議"が発足したのを機に合流しました。出版業界未経験から、編集と営業を学んでいます。本作りって最高！

●自身はどんな性格だと思いますか？

根暗。好き嫌いがある程度はっきりしている割に、あまり顔に出ない。

●休日の過ごし方は？

まとめて食料の買い出しに。大量に仕入れて生活費を節約します。ストーブの上のフライパンで何かを焼いて食うとかが好きです。猫は寄ってきてくれません。

●最近のニュースは？

古傷の膝が痛みます。そこから雪崩をうって腰痛も。年齢か。

CHIHEI MEMBERS



編集長率いる地平社の
愉快的仲間たち。地平
社は、こんな感じの
メンバーで本や雑誌
を作っています。



役員

木村 亮 KIMURA RYO

●地平社での仕事を教えてください。

基本は書籍の編集。自分で企画する場合も、熊谷さんや他のメンバーの企画をサポートする場合がありますが、全書籍のゲラを読んでいます。当たり前？あと、毎日出社しているのは私だけだと思います。

●前職では何をしてきましたか？

前職は大月書店編集部で、やはり社会・人文書の編集をしていました。10年近く前に『バーニー・サンダース自伝』をつくったときには熊谷さんにも褒められたものです。まさか二人とも失職するとは。

●自身はどんな性格だと思いますか？

生真面目で社交性に欠ける。淡々と物事を進めることを好み、あまり遊びをしない。いつも無言で、何か深遠なことを考えている顔をしている。しかし頭の中はメシのことです。いっばいである。

●休日の過ごし方は？

食べることと読むこと。あと Netflix も見ますが、結局はメシ関連の番組を見ている気がします。最近「白と黒のスプーン」。何しろ副題が「料理階級戦争」ですからね。「カツカレー」みたいなもんです。

●最近のニュースは？

昨年末に韓国旅行に行き、若い労働運動家たちと食事を共にすることができました。みんな心が温かいだけでなく、マルクスや社会主義を熱心に学んでいてびっくり。いや驚いてはいけないのですが、日本ではそれが「当たり前」ではなくって久しいから……。大きな刺激を受けました。



代表取締役 CEO、編集長

熊谷伸一郎 KUMAGAI SHINICHIRO

●地平社での仕事を教えてください。

雑誌と書籍の企画編集、経理と総務や資金繰りなど含めた会社の経営全般から、大量に発生する裏紙を活用したメモ帳づくり、掃除や植木の水やり、社員の宴会用のビール調達まで幅広くこなしています。

●前職では何をしてきましたか？

ものごころついたときからずっと雑誌づくりです。小学校の新聞係、中学校の新聞委員会、24歳からは四半世紀にわたり月刊誌を編集しています。若い頃のアルバイト経験は、書店、古書店のほか、宅急便、トラック運送、介護など多様です。

●自身はどんな性格だと思いますか？

皆さんあまり信じてくれませんが、内気でシャイで恥ずかしがり屋です。本当です。

●休日の過ごし方は？

家族でハイキング。一人でバイクツーリング。天気が良くなければ掃除と読書。土曜の夜は地元で友人たちと飲みに行くことが多いです。家にいると猫が寄ってきます。

●最近のニュースは？

なんといっても、「今年の漢字」に「熊」が選ばれたことでしょう。



地平社小話

『地平』の定期購読者の方には、毎月手書きのお手紙を入れています（手書きを印刷したもの）。これがなかなか好評で、ファンもいます。



期待のアルバイト

小林 翼 KOBAYASHI TSUBASA

●地平社での仕事を教えてください。
発送を中心とした事務作業や講演会などでの出張即売会などで販売業務を行っています。

●他にどんなアルバイトをしてきましたか？

神宮球場でヤクルトスワローズの試合補助のアルバイトをしていました。夏のナイター。9回裏、同点に追いついてからの延長逆転負けは絶望を感じました。帰りに飲んだポカリスエットは身体にしみわたりました。

●自身はどんな性格だと思いますか？

寂しがりや。実家に帰省した時は誰かがいる温かさを感じました。一人暮らしは大変寂しいです。

●休日の過ごし方は？

喫茶店で本を読む（実際は、ファミレスでドリンクバーとともに『地平』を読む）。クラフトビールを友人と飲みに行き、感傷に浸る。

●最近のニュースは？

Mr.Children が新しいアルバムを発表したこと（待ちくたびれました）。20歳になり、お酒が飲めるようになったこと。



大学院と二足、いや三足の草鞋

照井美優 TURUI MIYU

●地平社での仕事を教えてください。
主にメルマガ配信や発送手続き、定期購読者の名簿管理を行なっています。その他、雑誌の編集業務にも関わっています。

●これまでのアルバイト経験を教えてください。

学部時代に、居酒屋さんで賄い目当てにアルバイトをしていました。クリスマスシーズンに単発で入った某パン工場の苺のへた取りバイトは、室温4℃での作業でしたが、休憩時間に提供される肉まんが沁みました。

●自身はどんな性格だと思いますか？

小さなことでも考え込みがちで、コンビニでおにぎりを選ぶのにも時間がかかります。一度決めたら一直線ですが、決めるまでは優柔不断です。

●休日の過ごし方は？

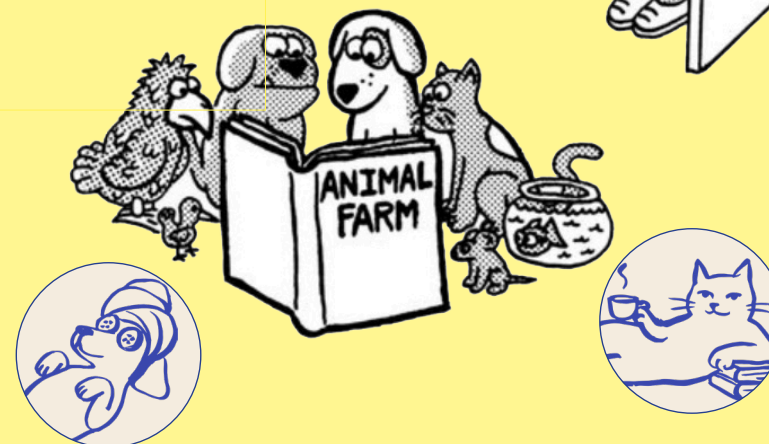
一日中、家から一歩も出ずに体を休めることが多いです。ときどき誰かとお出かけするときは、美味しいものを食べたり、運動をしたり、ライブに行ったりして自分を労います。

●最近のニュースは？

4年ぶりに運転をしました。不名誉な「ペーパー・ゴールド免許」を徐々に克服していきたいです。

地平社小話

地平社のロゴは、本をハグしている形です。本のページは創業時の6人のスタッフ、本自体は編集長、ハグしている手は読者のみなさんを表わしていて、みんなで作る出版社という意味が込められています♡



丸井 春 MARUI HARU

●地平社での仕事を教えてください。

主に雑誌編集部で編集の仕事をしていますが、作りもの担当としての方が貢献できている気がする。ときどき翻訳もしています。ウェブ『地平』のデザインと運用を担当しています。

●前職では何をしていましたか？

新聞社や出版社の編集部で働いてきました。1年間だけ外資の製造業企業でPRをしていたこともあります。フリーランスで冊子を作ったりもしています。

●自身はどんな性格だと思いますか？

いろいろなをあまり深く考えずあまり気を揉みません。得意と苦手がはっきりしているのとすべての物事がギリギリです。動物が好きです！

●休日の過ごし方は？

うさぎのあいちゃんと遊んだり、料理が好きなので何かしら作って食べて飲んだり、歩いたり寝たりしています。永遠に英語の勉強もしていますがあまり上達しません。

●最近のニュースは？

あいちゃんという7歳か8歳ぐらいの保護うさぎを家族に迎えました。あまりよくない環境にいて色々病気もありますが世界一かわいいです♡

赤瀬智彦 AKASE TOMOHIKO

●地平社での仕事を教えてください。

単行本の企画と編集がメインですが、雑誌の補助も時々しています。その他、SNSでニュースや雑誌記事を紹介する広報のような仕事もしています。

●前職では何をしてきましたか？

長らく単行本づくりばかりしていますが、学生時代は居酒屋でバイトをしていました。調理が下手だったので、おまへはカウンターでお客さんとしゃべってるとマスターに言われました。当時のお客さんの中に、今でもお世話になっている著者が何人かいます。

●自身はどんな性格だと思いますか？

没頭しているときは何でも来いみたいなテンションになりますが、お腹が空くと反応が鈍くなります。どちらかといえば、話をするより聞くほうが好きです。

●休日の過ごし方は？

植物園を散歩したり、子どもの買い物に付き合ったり、寝っ転がってNetflixを観たりしています。最近、ピーキー・ブラインダーズにハマりました。主人公のギャングたちが、いつか「プリテン・ファースト」を叫ぶファシストをやっつけてくれるはずだ。

●最近のニュースは？

昨年の夏に入社しました。月刊誌づくりの現場は殺伐としているものかと思っていましたが、誤解でした…。

激動の地平 に立つ 僕たちと 今と これから

小林翼（地平社アルバイト、大学生）

ある日、編集部にかかってきた一本の電話。「アルバイトは募集していますか？」電話の主は、まだ大学一年生だった小林くん。ジャーナリストを目指していると話した小林くんはそれから約一年、細かく地味な仕事も熱心にこなしてきました。社内では親しみをこめて「小林青年」と呼ばれる彼は、地平社のもっとも熱心な読者でもあります。まだ十代であった小林青年が、なぜ地平社でアルバイトをしようと思ったのか。働いてみてどうだったのか。曇りなき眼で見たその実態を報告してもらいます。

激動の地平に立つ

地平社という言論の「現場」に身を置いてから、およそ一年の月日が流れた。振り返れば、この一年間の政治と社会は、まさに目を覆いたくなるような激動の連続であった。

政治の表舞台では、石破政権から高市政権へと権力の天秤が大きく振れ、私たちが守るべきだと信じてきた価値観が次々と塗り替えられていくのを目の当たりにした。地方自治の現場に目を向ければ、兵庫県知事選を巡る混乱の中で、SNSを媒介とした膨大なフェイクニュースが奔流となって押し寄せ、事実が熱狂によりかき消されていく恐怖を覚えた。

さらに、憲法改正への危うい足取り、原発推進へと回帰するエネルギー政策。それらを支えるのは、他者の痛みを切り捨て、強い者の声だけを増幅させるポピュリズムの台頭だ。ガザをはじめとする世界各地での戦は止まる兆しを見せず、何の罪のない市民が犠牲になり続けている。こうした荒廃した景色を眺めていると、これからの市民社会が、より暗く、険しく、冷徹な「自己責任論」へと邁進していくのではないかと、深い危機感に襲われる。戦前のおおいが漂う時代。それが今、私たちの生きる現在

地である。

「地平」との邂逅、そして門をたたくまで

私が地平社と出会ったのは、大学生活の中で将来の指針を模索していた時期だった。もともと記者を志して大学に入学した私は、単なる情報の伝達者ではなく、権力を監視し、弱者の声、小さな声を拾い上げる言論のあり方を学びたいと考えていた。特に関心を持っていたのは「地方自治」のあり方や、「沖縄における基地問題」といった、構造的な不条理が凝縮されたテーマだった。

そんな時、書店の店頭でふと目に飛び込んできたのが、創刊したての月刊誌『地平』だった。手に取った瞬間、その一冊に込められた熱量に圧倒された。そこには、ただ客観的に事象を記述するのではない、言葉を武器にして社会の不条理と真っ向から「闘っている」人々の息遣いがあった。社会に対して議論のテーマを発信し続け、安易な解決策に逃げないその姿勢。たった一冊の雑誌が、これほどまでに強烈なメッセージを放つものなのかと、初めて知的な興奮を覚えたのを今でも鮮明に覚えている。

「この『地平』という言論環境の中で、自分も学びたい。この言葉の渦に身を投じたい」そ

地平社は神保町駅から徒歩2分。茶色いレンガのビルの2階です。ようこそ!!





の一念で、私は地平社の門をたたいた。それは、単なるアルバイトという選択ではなく、この閉塞感漂う社会に対して、言葉で抗う決意でもあった。

若者の社会運動と「地平」が結ぶ連帯

地平社で働き始めて気づいたのは、『地平』が単なる雑誌の枠を超え、若者たちの社会運動における一種の「パイプ」になりつつあるという事実だ。実際に運動の現場に足を運び、そこで出会う人々と言葉を交わすと、『地平』を介して瞬時に認識が共有されるケースが多々ある。私たちの雑誌は、いま現在、社会の矛盾と闘っている若者たちの拠り所となっているのだ。

例えば、沖縄出身の崎浜空音氏や、東京大学で学費値上げ反対運動に邁進する金澤恰氏の存在は、今の時代における象徴的な光景だろう。彼らのような若く、かつ鋭い発信力を持つ当事者たちの声を拾い上げ、記録として刻み込んでいくこと。それは、暴走する現代社会の流れに対して「待った」をかけるための、ささやかだが強靱な抵抗力になると私は信じている。

最近では、学生や若者たちが自主的に集まり、『地平』をテキストにした読書会を行なってい

る。そこでは、誌面の内容を鵜呑みにするのではなく、自分たちの現実を引き寄せて議論し、悩み、連帯のあり方を模索する姿がある。私たち若者には、まだ巨大な社会構造を変える力はないかもしれない。しかし、『地平』というプラットフォームを通じて学び、仲間を増やし、個人の尊厳が守られる社会をともに構想していくプロセスそのものが、未来を変えるための種火になると確信している。

編集長から学んだ「働くこと」の尊厳

日々の業務の中で、私にもっとも大きな影響を与えているのは熊谷編集長の存在だ。編集長は、私のことをいつも親しみを込めて「青年」と呼んでくださる。その呼びかけには、単なる上司と部下という関係を越えた、次世代への期待と温かさが込められているように感じる。

編集長の仕事ぶりを見てみると、驚かされることばかりだ。校了時期の凄まじい修羅場を除けば、編集長はいつも本当に楽しそうに仕事をしている。その表情を見ると、「働く」ということがこれほどまでに創造的で、喜びに満ちたものになり得るのかと、目から鱗が落ちる思いがする。将来、自分も編集長のように、心から仕事を楽しめる大人になりたい——。それ



は今、私の大きな人生目標の一つとなっている。また、編集長は「仕事に向き合う姿勢」についても、言葉ではなくその行動を通じて多くの教えを授けてくれた。例えば、発送作業という一見すると地味な裏方の作業一つをとっても、編集長は「この一冊を受け取る読者（お客さん）の姿をイメージして」と仰る。言葉を紡ぐことだけが編集者の仕事ではない。その言葉が誰の手元に届き、どう読まれるのか。読者という他者の存在を常に想像し、誠実に届けること。仕事とは、社会や他者との間に「誠実な関係」を築くことなのだ、日々の実体験をもって教えられた。

そんな編集長の唯一の(?)懸念点は、その驚異的なお酒の強さである。いまだかつて編集長が酔い潰れている姿を見たことがない。弱冠二十歳である私としては、今後もし一緒にお酒を酌み交わし、編集長の「隙」を見られる日を楽しみにしているのだが、一方で、これからも長く『地平』の舵取りを担っていただきたいと切に願っている。あまり無理をして肝臓を痛めないでほしい、長生きしていただきたい……。編集長後記を楽しみにしている読者の切実な願いである。どうか、体調には十分ご留意ください。

おわりに——萌芽する希望

私が地平社で働いてきたこの一年間、確かに社会は混迷を極め、暗い話題がその多くを占めていた。しかし、その暗雲の隙間から、確かな「希望の萌芽」が顔を出し始めた一年であったとも、私は確信している。

それは他でもない、多くの「青年たちの声」が社会に響き始めたことだ。既成の政治や閉塞した社会構造に抗い、自らの足で街頭に立ち、真っ直ぐに声を上げる若者たちの姿。その熱量こそが、停滞したこの国における最大の希望である。彼ら、彼女らの姿に、私自身の進むべき道を見出している。

私は、この『地平』という言論の場から、社会や権力に対して毅然と抵抗を続けたい。言葉を尽くし、対話を重ねること、不当な暴力や格差に誰かが涙することのない「悲しみのない社会」を築くための一助となりたい。

それは決して一人では成し得ない道だ。だからこそ、市民連帯の在り方をともに考え、ともにつくっていきたい。この『地平』の先に、一人ひとりの尊厳が等しく守られる未来があると信じて、私は前を向いて歩み続けたい。(完)

神保町ランチ探検隊

ぼくとランチ

Text by
赤瀬智彦 (書籍編集部)



ランチ探検隊員に指名されてしまった。昼食後、その日出かけた店のことをそんなに浮き浮きと喋っていたらどうか。僕がランチに一日のうちかなりの部分を賭けていることが、なぜバレたのだろう。

とはいえ、僕は美食家でも何でも無い。大体のものには、あぁなんて美味しいのだろうと感慨に浸ってしまう単純な人間だ。食レポができる繊細な舌や表現力を持ち合わせているわけでは全くない。では、何が僕を外食への旅に誘うのか。料理人である。

子ども時代、近所に安い定食屋があり、猫背の店主がいつも背中をカウンターに向けて、静かにフライパンを振っていた。肩の盛り上がりやシャツに浮き出た背骨の輪郭、一定間隔に刻まれる左腕のリズムが、外食の原体験として僕の身体に残っている。

数十年がたち神保町を徘徊する今もなお、その感覚を追い求めているところがある。首尾よくカウンター席に座ったら、あまり露骨に覗き込まないよう気をつけながらも、料理人の集中に自分の波長を徐々に合わせていくのだ。

これは音楽好き、芝居好きの方なら、おそらく誰もが体験しているだろう感覚である。

誰かに魅入るときに感じる身体の運動性は、相手の集中力が高いときほど自然と強まるものだ。携帯を覗くヒマなどないのである。うどん一杯、カレー一皿にかけた職人たちの情熱は、こちらが無理をしなくても勝手に流れ込んでくる。そして何かが降りてきたという確かな感触を得たとき、僕の脳内はすでに料理を口に運ぶときのイメージで覆い尽くされている。

正直言って僕は昼食時、会話をほとんど必要としない。だが、他人が不要なわけではない。僕はただ、赤の他人の皆様の立ち姿を遠くから見守ることで、午後を生き抜く力と幸福とを静かに手に入れるのである。

隊員おすすめの3品

仙臺
牛たんカレー 850円
神田神保町1-64-1 田中ビル 1F

ささ吟
牛肉しょうがおろしうどん 980円
神田神保町1-16-2 武藤ビル B1

小料理 菊水
とん汁定食 1000円
神田神保町 1-38

2025年に読んでよかった！
地平社メンバーそれぞれの
1冊を紹介します。

Review of Books



非人間性への抵抗

満州、筑豊、沖縄、インド、ブラジル革命、キューバ危機、光州事件、慰安婦問題、3.11—。その創作活動の「起源」を押しなべてみるだけで、富山妙子という芸術家が「越境のアーティスト」と評された所以が窺える。移動しながら、その「出会い」に馴染む形で表現手段をも変えながら（絵画、版画、スライド）、"100年"、ポストコロニアル批判に根差した表現を続けてきたのである。

監修した真鍋祐子が、富山本人から資料を受け継ぎ、世界史に与えた影響を探求する企てとして「富山」研究会を立ち上げてから10年という節目に上梓された。真鍋は、詩人・金時鐘

の「切れて、繋がる」思想の表現者と評し、富山が憎んだものは、植民地主義がむき出しにした非人間性だったと分析する。今日の非人間性の最たるものとしてガザジェノサイドが私たちの眼前に差し出されているが、本書を通じて富山作品と繋がるのがそれへの細やかな抵抗になるかもしれない。（工藤）



『越境のアーティスト 富山妙子』
真鍋祐子 監修
2025年12月、皓星社、3630円（税込）



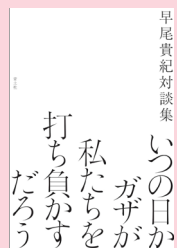
私たちとは誰か

強者に対しては卑屈に振る舞うが、自尊心を保つため、弱者やライバルに対しては過剰に居丈高な態度をとる。暴力的な言動の責任はつねに相手に転嫁し、手段と機会さえあれば殺戮にも加担する。人間の哀しき本性が方々で垣間見える昨今、正気を保つための本を探していた。

パレスチナ研究者・早尾貴紀氏の著作はそんな世にあって、まっとうさを指し続ける羅針盤だ。ここでは詩人の松下新土さんと語った章に絞って紹介したい。

二人は『ガザの光』という書を題材に、〈10・7〉前にガザ内部から上がっていた声を多層的に伝えている。その中に、イスラエルが人為的に強いてきたガザの電力「危機」を扱う章があった。「その代わりに根強く残り続けるのは…生きようとする精神そのものだけだ。それこそが最も深い闇を照らす光である」

早尾はこの闇を「われわれのこの世界、ここにレイシズムがある」と述べて受け止めた。氏の言葉自体が、闇を照らし出す光となっている。（智）



『いつの日かガザが私たちを打ち負かすだろう——早尾貴紀対談集』
早尾貴紀 著
2025年6月、青土社、3080円（税込）

音楽という〈戦前〉

『地平』でフォトグラファーの石田昌隆さんが連載中の「Sounds of the World」。その2025年9月号に、寺尾紗穂さんが登場した。埋もれた民謡などを発掘するだけでなく、可能な限りその歌が歌われていた現地へと足を伸ばし、その歴史的、民俗的な背景を知ったうえで、歌いあげるミュージシャンだ。

南洋パラオや日本からの移民を取り上げた彼女の著作をこれまでも読んでいたが、〈歌〉に導かれた細い糸をたどって、歴史の後景からもさらに色褪せてしまった〈誰か〉の生きざまに、いつも胸の奥を掴まれていた。

今回の本は、「ミュージック・マガジン」誌で5年にわたり綴られていた連載をまとめたものである。第二次世界大戦への歩みが深まっていくなか、日常的な〈声〉としても、たしかに〈戦

争〉が顔をのぞかせていくさまが、読む者の耳もとで囁いているかのような筆致で描かれる。反戦を訴えていた人が、いつのまにか国威発揚のための音楽をつくり、奏でようになっている現実。そのうすら寒さは、残念ながら現代においても生々しく、いきている。

渡邊白泉の無季俳句、「戦争が廊下の奥に立つてゐた」は、私たちがいま聴いている音楽のなかにも、すでにあらわれているのである。（翼）



『戦前音楽探訪』
寺尾紗穂 著
2025年7月、ミュージック・マガジン
2200円（税込）



母の痛みが映し出したもの

『地平』のコーナー「編集部イチオシ新刊」では、小さな出版社や専門出版社、地方出版社の本を紹介することになっている。大手出版社の新刊はもともと話題になりやすいのだから、わざわざ『地平』で取り上げなくてもいいと思うのだ。そのため本書はこちらで取り上げることにした。

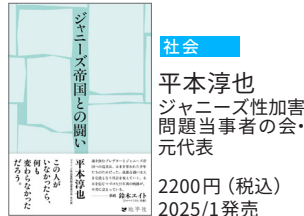
著者が高校生のとき、母が統合失調症を発症する。母の人生に何があったのか。著者が研究を重ねて描き出したその記録は、植民地支配と戦争、性売買と暴力、移住と差別のなかを、痛みとともに生きた女性の物語だ。母の生を理解しようとする著者の方法は、とても身体的でもある。食べること、食べ物を手に入れること、料理することに、多大な注意を払っているのだ。

この本は、近所の友人たちとの読書会で読んだ。著者の思い出であるセンソジョンを、私も作って食べてみた（読書会では振る舞わなかったが）。そんなふうに、身体を使ってじっくり読みたい本なのだ。（亮）



『戦争みたいな味がする』
グレイス・M・チョー 著、石山徳子 訳
2025年7月、集英社、3080円（税込）

ジャーニーズ帝国との闘い



社会
平本淳也
ジャーニーズ性加害
問題当事者の会・
元代表
2200円（税込）
2025/1発売

まだ、終わっていない——。ジャーニーズ・ジュニアとして活動していた14歳のとき、ジャーニー喜多川による性加害の犠牲になった。22歳での被害告白、長きにわたる孤独な闘い。性暴力事件の当事者による、半生の記録とメッセージ。

お寺に嫁いだ私がフェミニズムに出会って考えたこと



フェミニズム
森山りんこ
深沢潮さん推薦！
1980円（税込）
2025/4発売

「救い」は仏様でなくフェミニズムがくれた。お坊さんと結婚して飛び込んだ仏教界は違和感だらけ。モヤモヤの毎日に救いをくれたのは仏様よりもフェミニズムだった。日本のお寺の持続可能性を問いかける当事者エッセイ。

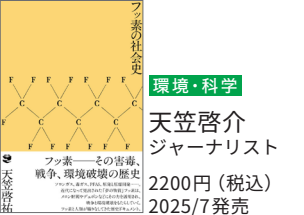
ルポ 司法崩壊



司法
後藤秀典
ジャーナリスト
1980円（税込）
2025/5発売

「公平らしさ」を失った最高裁へ——。国も東京電力も原発事故の責任なし？ 国策に忠実に従い、政府に忖度する「法の番人」最高裁のもと、司法全体の劣化が進む。司法の独立が内側から崩れていく現状を報告。『地平』の好評連載を書籍化。

フッ素の社会史



環境・科学
天笠啓介
ジャーナリスト
2200円（税込）
2025/7発売

戦争と環境破壊、人体への害毒の歴史。近代になって見出された「夢の物質」フッ素は、戦争と環境汚染、人体の破壊をもたらす物質だった。フロンガス、毒ガス、PFAS、原発と原爆……。フッ素と人類が織りなしてきた歴史ドキュメンタリー。

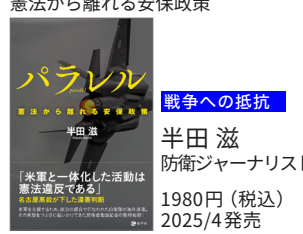
ハチドリ舎のつくりかた



社会
安彦恵里香
ハチドリ舎店主
1980円（税込）
2024/11発売

まじめに社会を語っても浮かない場所がほしい！ 広島平和記念公園から歩いてすぐ。ハチドリ舎は「まじめなことを話しても引かれぬ場所」。人と人、広島と世界をつなげるソーシャルブックカフェはどのように生まれたのか？

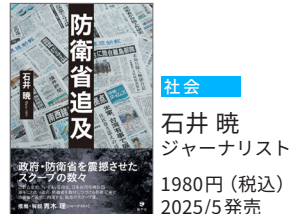
パラレル



戦争への抵抗
半田滋
防衛ジャーナリスト
1980円（税込）
2025/4発売

防衛省担当記者の取材秘録。憲法9条と、軍事力強化が進む実際の安保政策。その乖離はもはやパラレルワールドのようだ。イラク戦争での自衛隊の活動を違憲と認めた名古屋高裁判決に光を当て、憲法と安保政策の現在地を明らかにする。

防衛省追及



社会
石井 暁
ジャーナリスト
1980円（税込）
2025/5発売

政府を震撼させつづけたスクープ集！ 辺野古密約、「いずも」空母化、日米共同作戦計画……シビリアン・コントロールの枠を外れかねない最大の勢力組織を、30年にわたり監視してきた記者の執念のスクープ集。解説：青木 理氏。

イスラエル＝アメリカの新植民地主義



戦争・紛争
ハミッド・ダバン
コロンビア大学教授
早尾貴紀（訳）
2750円（税込）
2025/6発売

〈10.7〉以後、私たちは共犯者となった——。パレスチナ虐殺を目の当たりにしながら、何もできないままなのか。故エドワード・サイードの同志で思想的継承者が見出した新たな「抵抗」の可能性。ヨーロッパ中心主義的な「理性」を徹底的に批判する。

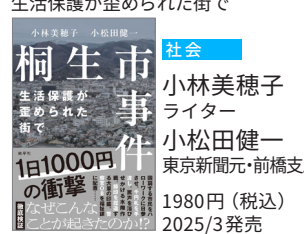
杉並は止まらない



地方自治
岸本聡子
東京都杉並区長
1760円（税込）
2024/11発売

民主主義を、アップデートする。ケア中心の脱炭素社会、住民自治のアップデートといったビジョンを掲げ、全国から注目を集める杉並区長・岸本聡子。さまざまな壁にぶつかりながらも、住民と一緒に前進してきた2年間の闘いを報告する。

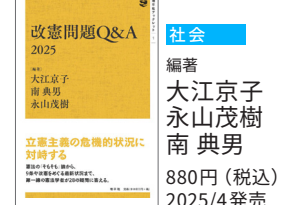
桐生市事件



社会
小林美穂子
ライター
小松田健一
東京新聞元・前橋支局長
1980円（税込）
2025/3発売

1日1000円の衝撃。捺印を捏造し、保護費を毎日1000円だけ手渡し、残りは金庫にしまうなど、信じがたい運用が発覚した群馬県桐生市の生活保護行政。何が起きていたのか。支援と取材の現場から迫ったルポルタージュ。

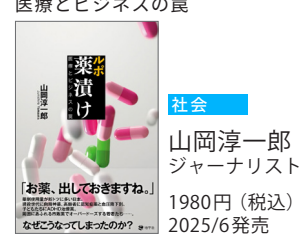
改憲問題Q&A 2025



社会
編著
大江京子
永山茂樹
南 典男
880円（税込）
2025/4発売

最新状況をふまえて疑問に答える。政府と主権者との契約であるはずの憲法を、政府が守らない——立憲主義の危機的状況で何が起きているのか。憲法の「そもそも」から改憲をめぐる最新状況まで、第一線の憲法学者が28の疑問に答える。

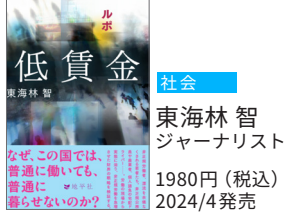
ルポ 薬漬け



社会
山岡淳一郎
ジャーナリスト
1980円（税込）
2025/6発売

人と薬をとりまく修羅と再生の物語。薬剤使用量が断トツに多い日本。現役世代に向精神薬、高齢者に認知症薬と血圧降下剤、子どもたちにADHD治療薬。周囲にあふれる市販薬でオーバー・ドーズする若者たち。なぜこうなってしまったのか？

ルポ 低賃金



社会
東海林 智
ジャーナリスト
1980円（税込）
2024/4発売

なぜ普通に働いても普通に暮らせないのか。非正規労働者、漂流を余儀なくされる若者たち、シングルマザーや個人請負の宅配ドライバー。働く人々の現場から低賃金の国のありように迫り、非正規労働を急増させた財界の戦略を検証する。

世界史の中の戦後思想



思想
三宅芳夫
千葉大学教授
3080円（税込）
2024/4発売

危機の今、戦後思想の可能性を再読する。自由民主主義と資本主義のシステムが揺らくなか、私たちはどのような思想に依拠できるのか——。世界システムの歴史的展開をたどり、その文脈から日本の「戦後思想」を再考する。

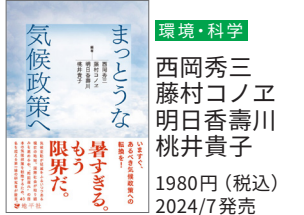
NHK 日本的メディアの内幕



メディア
立岩陽一郎
ジャーナリスト
2200円（税込）
2024/7発売

巨大メディアの生態と実態に迫る！ 政府と大企業から独立した報道と番組制作をおこなうとし、受信料で支えられているNHK。だが、その内実はどうか。NHKを離れたジャーナリストが「公共放送」の現在から、あるべき姿を問う。

まっとうな気候政策へ



環境・科学
西岡秀三
藤村コノエ
明日香壽川
桃井貴子
1980円（税込）
2024/7発売

未来のために、今すぐ転換を！ 気候変動が猛威をふるいつつある現在の地球。国際社会が取り組みを進める中、「周回遅れ」の日本。このままの気候政策では将来に禍根を残すことになる。40名を超える第一線の研究者が提言。

絶望からの新聞論



メディア
南 彰
琉球新報編集委員
1980円（税込）
2024/4発売

新聞はもう本当にダメなのか？——。政治への忖度が横行し、部数激減の中で内部から崩れる新聞メディア。どのようなメディア環境を構想すればいいのか。希望を再生することは可能か。元朝日新聞エース記者が考える「新聞の残し方」。

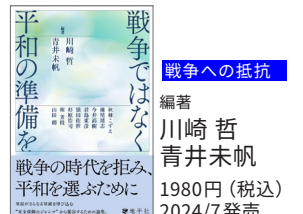
経済安保が社会を壊す



社会
島菌 進
井原 聰
海渡雄一
坂本雅子
天笠啓祐
1980円（税込）
2024/4発売

経済政策の「安保化」、専門知による批判。政治・外交のみならず経済、社会に侵入しつつある「経済安保」。何が起きているのか。市民的自由や平和的生存権に与えるインパクトを可視化。「セキュリティ・クリアランス」法案をふまえた緊急出版。

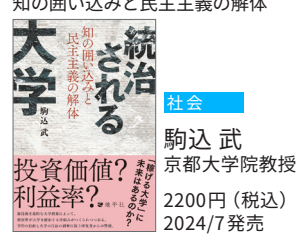
戦争ではなく平和の準備を



戦争への抵抗
編著
川崎 哲
青井未帆
1980円（税込）
2024/7発売

加速する戦争準備に抗うための論集。軍事費の大幅な増加や、さらなる米軍との一体化など、政府は急速に「抑止力の強化」を軍拡を進めている。戦争ではなく平和を構想していくために、気鋭の研究者や専門家が発言を掘り下げる。

統治される大学



社会
駒込 武
京都大学院教授
2200円（税込）
2024/7発売

大学知を囲い込む「改革」の実態。続けざまに強行採決された国際卓越研究大学法案と国立大学法人法案をはじめ、新自由主義的な大学政策で政財界が大学を統治する仕組みが整いつつある。「改革」に抗いつづけてきた研究者のレポート。

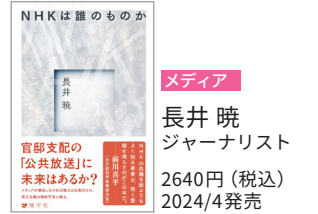
デジタル・デモクラシー



社会
内田聖子
ジャーナリスト
2200円（税込）
2024/4発売

巨大IT企業vs民主主義——市民たちの闘い。ビッグ・テックが独占するデジタル技術で、監視や搾取が世界的に広がり、抗議の声がわきおこっている。公正で倫理的なテクノロジーを求める、デジタル時代の民主主義の姿を描き出す。

NHKは誰のものか



メディア
長井 暁
ジャーナリスト
2640円（税込）
2024/4発売

官邸支配の「公共放送」に未来はあるか？ 政治家の介入による番組改変を告発した元NHKディレクターによる初のドキュメント。ETV2001番組改変事件からジャーニーズ性加害への加担まで、劣化するNHKの内実を記し、再生の道を模索する。

ガザ日記 ジェノサイドの記録



戦争・紛争
アーティフ・アブー・サイフ
作家
中野真紀子 訳
3080円（税込）
2024/5発売

戦場と空爆、逃避行と喪失の圧倒的記録。2023年10月7日のあの日から、著者の日記は始まる。命懸けの逃避行、多すぎる死、途切れた日常、終わらない爆撃。世界11言語で緊急出版。（諸経費を除く売上金はパレスチナ支援団体に寄付される）

戦友会狂騒曲



社会
遠藤美幸
神田外語大学
埼玉大学兼任講師
1980円（税込）
2024/7発売

不戦こそ、慰霊。元兵士たちの戦後を共に歩く——。遺族などの関係者でもなく、靖国神社にもむしろ違和感をもつ筆者が、なぜか老人たちの集まる戦友会の「お世話係」を担うことに。

愛と連帯

非正規労働者、国会へ



社会
大橋ゆうこ
元参議院議員
1760円(税込)
2025/7 発売

働く人たちの使い捨てを許さない。私は氷河期世代。非正規の仕事で生きてきた。解雇され闘った経験を経て、国会議員に。あなたと一緒に闘う、プレない政治家のストーリー。

ありんことカンナの花



絵本
毛利 まさみち
(切り絵)
ナムーラ ミチヨ
(文)
1760円 (税込)
2025/8 発売

やけ野原となった広島に、真っ赤な花が大きくさいて……。小さな小さな虫たちが見た、人間たちの戦争のおはなし。被爆から約1か月後、広島爆心地近くに咲いたカンナの花。「ありんこ」たちが主役の切り絵絵本。

非核兵器地帯という選択



社会
梅林宏道
ピースデポ特別顧問
2640円 (税込)
2025/9 発売

核軍拡の流れを反転させるために。核戦争の脅威は深刻である。核の脅威を地球上からなくすための現実的な選択肢として、本書は非核兵器地帯の道筋を示す。核なき北東アジア、核なき世界に向け、構想力のある外交と社会運動のために。

原発をとめた人びと

奥能登・珠洲 震源地からの伝言



社会
七沢 潔
ジャーナリスト
1980円 (税込)
2024/11 発売

もしそこに原発が完成していたら……。2024年1月の能登半島地震で被災した珠洲市は、かつて原発の立地計画を住民運動が撤回させていた。最悪の事態を防いでくれた先人たちの取り組みを再現する、現地取材によるドキュメント。

核と原子力の非人間性

(地平社ブックレット)



社会
編著
大石芳野
高村 薫
小沼通二
佐々木 寛
990円 (税込)
2025/7 発売

被ばく国家・日本で核の非人道性を考える。核抑止と原発推進に固執する日本政府。核は人間と社会の何を破壊するのか。「世界平和とアピール七人委員会」による、平和と核廃絶を希求する講演と討議の記録。

ルポ イバラキ

民主主義が消えていく

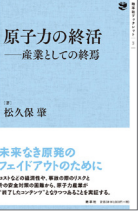


社会
小林美希
ジャーナリスト
1980円 (税込)
2025/7 発売

民主主義はどこへ? 「ばか、死ぬ、出ていけ」。知事の怒声が響く茨城県庁。副知事の秘書がパワハラを苦に自殺。その報告書は非公開。地域の政財界を牛耳る高齢男性たち。議会に野党はほとんどおらず、地元メディアは御用達。何が起きているか。

原子力の終活

産業としての終焉 (地平社ブックレット)



社会
松久保 肇
原子力資料情報室
共同代表・事務局長
1100円 (税込)
2025/9 発売

未来なき原発のフェイドアウトのために。原発推進に再び舵を切った日本政府。だが原発は高コストで産業として成り立たず、気候変動対策にもなりえないことが明らかになっている。論点を整理し、脱原発が唯一の選択肢であることを示す。

入門 資本主義

私たちの生きる世界



社会
松井 暁
専修大学経済学部教授
2420円 (税込)
2025/12 発売

資本主義とは、そもそもどんな社会なのか? 「会社と仕事」「就職活動」といった身近な問題から、「格差と競争」「経済政策」といった大きな問題まで、「常識」を問い直す批判的な目で解説していく。目から鱗の経済入門。

広島のともしび

原爆小頭症「きのこ会」と記者・秋信利彦



社会
平尾直政
ジャーナリスト
2640円 (税込)
2025/7 発売

記者はなぜ「報道しない」道を選んだのか? 原爆被害者を守るため、自ら報道することを封じた反骨の記者がいた。当事者に寄り添い、核被害を告発し続けたジャーナリスト・秋信利彦と原爆小頭症被爆者家族の会「きのこ会」の60年の記録。

戦争ってなに?



絵本
こやま峰子 (著)
藤本四郎 (絵)
1760円 (税込)
2025/8 発売

「戦争って いったい 何なの?」おとなりの和子ちゃんのお父さんに「赤紙」がきた。そしてぼくのお父さんにも……。幼い日に戦争を経験した作者が、「ぼく」を通じて問いかける。

マルクス・リバイバル

キーワードと新解釈



思想
マルチェロ・ムスト
(編著)
斎藤幸平 (監訳)
佐々木隆治 (監訳)
4400円 (税込)
2025/9 発売

危機の時代に、マルクスを「再発見」する。貧困と不平等、気候危機、そして戦争。資本主義をラディカルに分析したマルクスの思想が、いま新たな解釈とともに復権している。世界的に知られる研究者たちが、22の重要概念を解説。

Colabo 攻撃

暴走するネット社会とミソジニー



社会
仁藤夢乃 (編著)
(著) 安田浩一
神原 元、小川たまか
太田啓子、田中優子
2200円 (税込)
2026/1 発売

少女たちの居場所は、なぜ狙われたのか? SNSで拡散されるデマと誹謗中傷。女性蔑視を収益化するインフルエンサー。メディアの加担と沈黙。事実と経緯をまとめ、社会が向き合ふべき課題を示す。

月刊『地平』これまでの特集

- 2024年7月号
コトバの復興
パレスチナとともに
- 2024年8月号
極右台頭
戦争準備への対抗
- 2024年9月号
奪われるフェミニズム
- 2024年10月号
ジャーナリズムをさがせば
核廃絶への意志
- 2024年10月号
学問の独立を守れ
大学の変容と高学費
- 2024年11月号
子どもたちの逃走と闘争
被告・最高裁。
- 2024年12月号
自衛隊と殺人ローン
イスラエルの戦争を批判する
- 2025年1月号
再エネか、原発か。
- 2025年1月号
アメリカ選挙と民主主義
大阪アモクラシー
- 2025年2月号
秘密保護法10年
韓国激動
- リッチに課税せよ
食と資本主義
- 2025年3月号
原子力の終活
- 生きていく治安維持法
データセンターという怪物
- 2025年4月号
軍事化される西日本
脱プラスチック社会へ
- 2025年5月号
新自由主義の30年
- 声をあげられる大学へ
ワクチン問題。
- 2025年6月号
軍事費の研究
性被害と裁判
- 2025年7月号
トランプ政治への反撃
- 新しいコトバのために
戦争国家を拒む——安保法制10年の現実
- 2025年8月号
トランプ・シヨックの深層
- 不戦の100年へ
これからの反核
- 2025年9月号
生きる岩を築く——生活保護から生活保障へ
- 東アジアの不再戦のために
ヒロシマ史論
- 2025年10月号
トランプ時代の気候正義
- 2025年10月号
排外主義、再び
- ガザジェノサイドを止めるために
軍事化されるインターネット
- 2025年11月号
左派は復活できるか
隣人である移民
- 韓国政治の新局面
- 2025年12月号
加害と和解——東アジアの不再戦のために2
沈黙を拒む——ジェノサイドに抗議する国際社会
- 宗教2世の苦悩
- 2026年1月号
困窮ニッポン——物価高騰と排外主義
軍拡からの脱出
- ソーシャリズム復活——連帯と自由のNY
- 2026年2月号
極右と極中道——現代イデオロギー批判
亡国の原発再稼働
「台湾有事」が作り出される前に



Staff Members

-Editor in Chief/ CEO
Kumagai Shinichiro

-Editor
Kimura Ryo
Ishida Tasque
Akase Tomohiko
Marui Haru
Terui Miyu

-Sales/ Public Relations
Kudo Kohji

-Assistant
Kobayashi Tsubasa
Higashidate Tamaki

-Special Thanks to
Bianca Yukiko Watanabe
Shiraishi Minori
Sugimoto Rei
Our Families, Partners and Animal Families.

株式会社地平社

101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-32 白石ビル 2 階
電話：03-6260-5480 (代) FAX：03-6260-5482

HP: <https://chiheisha.co.jp/>
Web 地平: <https://chihei.net/>

